

石井芙桑雄さん追悼

渡 辺 公 三

石井さんの訃報に接したときには驚きのあまり言葉を失った。その数日前に急遽、入院されたという。私が、いつものように自転車で颯爽とキャンパスを走る石井さんの姿をお見かけしたのが、その入院の日よりも後だったとしか思えないことも、驚きを大きくした。あれは幻だったのだろうか。見慣れたブレザー姿で自転車を駆る石井さんは、私に気づいて軽く会釈して、口元に笑みをたたえて、少し眼をそらせて視界から消えた。口元の笑みと少しそらされた視線、親愛と含羞、が、あまり深くお付き合いする機会の残念ながらなかった石井さんの私に残された印象だった。

私が立命館大学文学部に着任した1994年、石井さんはすでに大ベテランの風格で、教授会やさまざまな委員会などで要所要所で発言されていた。右も左もわからない駆け出しの私にとって、学内ルールをその沿革までも詳細かつ正確に把握されて、さまざまに指摘される石井さんの姿は、常に驚きと敬意の対象だった。「多士済済」は「たしせいせい」と読むのが正しいという指摘（当時の文学部はほんとうに多士済済だった）も石井さんのいわば「お箱」だった。

当時、西川長夫所長のもとで「専任研究員」なるものを拝命した言語文化研究所での仕事から、石井先生とは研究所の業務で接する機会も少なくなかったように記憶している。そして言語文化研究所の紀要に書かれた、ゲオルグ・フォルスターをめぐる1990年の論考は、私にとって石井さんそのものとして記憶されることになった。

フォルスターは若くして父とともにイギリスの探検家キャプテン・クックの航海に同行し、「世界」を見た後、長じてフランス革命をライン川の向こうで経験し、いわゆる「ドイツ啓蒙派」として革命に賛同し、マインツの革命に参加して、震源地フランス・パリの動向を現場で見ようとパリに赴き、情勢の大きな変動の中でフランスに客死した、ラディカルな実践的な思想家だった。その生き方を石井さんは冷静ながら深いシンパシーをもって描かれている。常に分裂に苛まれたドイツへ帰還しえなかった亡命者への石井さんの共感、この論文で強く印象付けられる。思想上の孤立を恐れず自恃を貫く「亡命者」への共感、最近のご業績のゲオルグ・ビューヒナーの検討においても一貫しているに違いない。追悼のためにも、まだ未読のこの近年のご業績を読まねばならない。そしておそらく大いなる共感を寄せられていたと思われるハイネへの評価もまた石井さんの研究計画の重要な一環として予定されていたのではないだろうか。

自恃を貫く亡命者への、冷静な距離を置いた深い共感。わたしにとって石井芙桑雄さんの印象はこうした表現に凝縮される。その共感がどこからくるのか、お話しをうかがう機会を永遠に失った。ライン川の此岸、フランスと、人類学のフィールドとしてのアフリカを第二、第三の故郷とする私にとって、最初はどう読んでいいか分からなかった個性的なお名前の由来とともに、生きた経験によるドイツを知る機会を永遠に失ったように思える。

石井芙桑雄さん、ご冥福を祈ります。

(本学先端総合学術研究科教授)